



©ai ueda

第180回定期演奏会

2021年1月29日(金) 18:00開場 19:00開演

三井住友海上しらかわホール

指揮/山下一史 ピアノ/務川慧悟

・チャイコフスキー：弦楽セレナーデ ハ長調Op.48

・モーツァルト：ピアノ協奏曲第27番 変ロ長調K.595

当初の予定より曲目が変更になりました。

一般発売 12/17 [会員先行 12/15.16]

過ぎゆく日常のなかで〈音楽の時間〉に身をゆだねる——オーケストラの響きを生演奏で味わうという、この特別な体験があってこそ、心はほぐれて豊かなよこほりを感じ直すことができるように思えます。

セントラル愛知交響楽団、今季の定期演奏会では、さまざまな名作・傑作・知られざる佳品などを紹介しながら、作曲家たちが音楽で自在に旅した国々の薫り、時代を超えてはばたく想像の色彩をたっぷりとお届けしています。

今回・第179回定期のブルッフ、そしてリヒャルト・シュトラウスも、独特の風味と輝きを魅せてくれる素敵な作品たちですが、…次回・第180回(来年1月29日)では、北国の名匠チャイコフスキーと、彼も深く敬愛を捧げた天才・モーツァルトの傑作をお楽しみいただけます。

◆ふたりの〈旅の作曲家〉を聴く

次回お聴きいただく二人の作曲家は、生涯にわたって旅をし続けた人たちでもあります。

今でこそ、世界中を飛びまわる音楽家も珍しくない世の中になりましたが、まだ飛行機もない時代の人たちは、街から街へと何日もかけて移動するわけです。〈旅〉の重みが違います。情報の伝わる速さや現代とは桁違い。遠い国・見知らぬ街へ旅をして〈その土地の音楽を体験する〉という経験も、作曲家の人生にゆくりと深く、しみとおっていったことでしょう。

のちほどご紹介するヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~91)は、〈神童〉とうたわれた幼少期から、父に連れられて各地の宮廷をめぐるその才能を披露する旅を重ねていました。

生まれ故郷のザルツブルクを飛び出して、楽都ウィーンで活躍するようになってからも、自作の上演などさまざまな機会でもヨーロッパ中を広く巡り、各地で生まれる最新の音楽文化を肌身で感じて、自身の音楽を豊かに広げています。馬車で旅する時代にもかかわらず、モーツァルトの旅路は驚くほど広く、豊かでした。

そして、北国ロシアの作曲家、ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840~1893)も、〈旅の音楽家〉でした。

モスクワ音楽院の先生を辞めて作曲に専念するようになってからは、ロシア国内だけでなく、ドイツやフランス、南国イタリアやスイスの保養地など、ヨーロッパ各地を転々としながらオペラやバレエ、交響曲の大作を書いています。

そんなチャイコフスキー、あつという間に破綻した不幸な結婚から逃げ出すようにロシアを離れ、あちこちで心身を癒しながら作曲に打ち込んだ旅の日々にも、素晴らしい傑作を数々生んでいます。バレエ音楽《白鳥の湖》や交響曲第4番……。イタリアへの旅は、明るさがはじけるような《イタリア奇想曲》を生み、はたまた美しい弦楽六重奏曲《フィレンツェの思い出》をのこします。

そんな、西欧とロシアを往還する充実した日々にも、どこから依頼されるでもなく、内なる芸術的な衝動にしたがって書かれたという傑作が、次回定期でまずお聴きいただく〈弦楽セレナーデ〉作品48(1880年)です。

◆モーツァルトへの愛、豊かな陰翳 ——チャイコフスキー〈弦楽セレナーデ〉

チャイコフスキーは、この〈弦楽セレナーデ〉について語った手紙のなかで、第1楽章は「モーツァルトへの畏敬をこめた捧げものであり、モーツァルトの様式を意識して模倣した」という意味のことを書いています。

生まれた時代も作風も異なりますが、チャイコフスキーは天才・モーツァルトを心から愛してやみませんでした。音楽院の先生だった頃は、学生たちにモーツァルトの多彩にして流麗な形式美や、簡明なサウンドの素晴らしさをよく教えていました。

のちに自らモーツァルトのオペラ《フィガロの結婚》ロシア語版の翻訳を手がけ、その素晴らしい音楽と言葉との関係をロシアの若い音楽家たちにも伝えようと努力。いつか、最愛のオペラ《ドン・ジョヴァンニ》のロシア語版

も……と願っていたようです。

のちに旅行先のパリで、この《ドン・ジョヴァンニ》の自筆譜を実際に見ることができたチャイコフスキーは、〈モーツァルトその人の手をとって語り合ったようだ!〉と感激に震えたそうですが、このあたりも含めて、明快で詳しい伊藤恵子【作曲家◎人と作品 チャイコフスキー】[音楽之友社、2005年]をコンサートの予習にお勧めします。

それほどにモーツァルトを愛したというチャイコフスキー。この〈弦楽セレナーデ〉はしかし、モーツァルトをそっくり真似たわけではありません。

天才への敬愛、を直接にあらわした作品というならば、むしろ、組曲第4番《モーツァルトティアーナ》作品61(1887年)という、モーツァルトのピアノ小品4つをオーケストラ用に編曲・翻案した素敵な曲があるのですが……〈弦楽セレナーデ〉のほうは、愛が深く融け込んでいる、と言ったほうがよいかも知れません。

第1楽章の冒頭——日本ではテレビCMに使われて不思議なイメージもついている音楽ですが、先入観はきれいに忘れていただいて……、その豊かで美しいハーモニー、重厚な詩情が歯切れのよいリズムに描かれるこの冒頭から、豊かな波をつくるような明晰な主部に入っても、調和と変化の美しい音世界は、モーツァルトへの愛をたたえたもの。それでいて、真似にならないチャイコフスキー節というあたりが、天才同士の交歓というべきでしょうか。

第2楽章は、チャイコフスキー得意の優美なワルツ(いわゆるウィンナ・ワルツとはリズムの取り方が違うあたりも面白いところです)。第3楽章《エレジー(悲歌)》の、音階をゆくり上にもわかってただるだけのシンプルなメロディの美しさときたら!……悲歌なのに、短調ではなく長調で書かれているというあたりも、モーツァルト晩年の緩徐楽章にみられる明暗のゆらめきと、ならべて味わってこそ見えてくるものがあります。

そして、フィナーレで躍動する、弦楽合奏からしか生まれないあの美しい密度……。そして、冒頭のあのメロディがふたたび回帰して、作品全体を壮大な円環のように包んで終わるときの感銘! これはぜひ、生演奏で体感していただきたいものです。

指揮台に立つのは、マエストロ山下一史。仙台フィルの正指揮者として同団の実力をしっかりと磨き上げたのをはじめ、全国のオーケストラとの共演、オペラ指揮者としての活躍でも見事な成果を挙げてきました。もっか千葉交響楽団の音楽監督として関東オーケストラ界の充実を磨きつつ、東京藝大教授として後進の育成にも努める重要な存在。セントラル愛知交響楽団の覇気をどこまで広く深く響かせてくれるか、この共演にも期待です。

◆最後の年の、清明な美しさ! ——モーツァルト〈ピアノ協奏曲第27番 変ロ長調〉

モーツァルトの人生の旅は、残酷なほどに早く終わります。1791年12月5日、未完の《レクイエム》を絶筆に息をひきとったとき、彼はまだ35歳という若さでした。

しかし、この最後の年に残された作品の数々……オペラ《魔笛》をはじめ驚くほどに素晴らしい作品が並ぶなか、次回定期でお聴きいただく〈ピアノ協奏曲第27番 変ロ長調〉K.595も、澄みやかな光に満ちた傑作です。

モーツァルトの早すぎる晩年、楽都ウィーンの移り気な聴衆は、彼の音楽に熱狂しなくなっていました。自作自演で人気をとっていたピアノ協奏曲も、この第27番は久々の作だったのですが、窮地を脱する起死回生の1曲とはならず。しかし、この清明な美しさときたら。

自筆譜を研究したところ、仕上げたのが亡くなる1791年の1月とはいえ、前半はさかのぼること1788年頃には完成したのでは……という説もあるそうで、この曲と〈死〉を重ねて考えることは、危険です。とはいえ、柔らかい波のように流れ出す冒頭からして、モーツァルトのそれまでのピアノ協奏曲とはまた違った世界が広がるのもたしか。

そして、絶品の緩徐楽章! 微笑みの融けたような気品、と言いましょか。その中に繰り広げられる、穏やかな至福と、ときに翳(かげ)の豊かな表情の変化……。そこに表現される感情のグラデーションの深みについては、メイナード・ソロモンの大著『モーツァルト』[石井宏訳/新書館、1999年]の、とりわけ第12章《楽園の愁い》からも豊かな示唆を得ることかと思えます。

ちなみに、終楽章のテーマは、同じ年に書かれた素敵な歌曲《春への憧れ》にも生まれ変わっているというあたり、生涯と重ねるといろいろ考えさせられますが……ナチュラルな歌謡性が晴れやかに響く本作、とても幸せな気持ちで(そして豊穡と共に!) 帰路についていただけるはずですよ。

ソロをつとめるのは、愛知県出身、フランスで研鑽を積んでラヴェルやラフマニノフなど素晴らしいCDアルバムも世におくっている務川慧悟さん。その知性と感性が向き合うモーツァルト最後のコンチェルト、さてどのような新しい音世界がひらけるでしょうか……ぜひ次回もホールでお逢いいたしましょう!

やまの たけひろ 山野雄大

ライター[音楽・舞踊評論]。『音楽の友』『レコード芸術』『バンドジャーナル』各誌をはじめ雑誌・新聞への寄稿、テレビ・ラジオ番組での解説、CDライナーノート・企画構成、オーケストラやバレエ公演の演目解説、取材撮影など多数。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんば》司会・構成。

Profile

